

震災後のわが社

ミツフジ株式会社

所在地：伊達郡川俣町
事業内容：ウェアラブルIoT製品
(導電性繊維電極テープ、着衣型ウェア含む)



ミツフジ株式会社は1956年、三寺富士二(現社長の祖父)が西陣織の帯工場として創業しました。その後ラッセルレース業に転換しますが、日本の繊維産業は時代の流れと共に斜陽化していきます。1994年に2代目三寺康廣(現社長の父親)がそれまでのメイン商材であったレースや服飾雑品から機能性繊維という新たな展開を求めてアメリカに渡り、翌年銀メッキ繊維を製造する会社と独占販売契約を結びました。その後、研究開発を重ね、西陣織工場の時代から受け継がれたアナログの職人技術による銀メッキ繊維の独自の製織方法を確立し、銀メッキ導電性繊維AGposs®※1(エージーポス)を発売しました。AGposs®は産業資材や抗菌材料の用途で提供するようになりますが、販売先メーカーの生産スケジュールに左右されてしまうなど主体的な製品展開を行うことが難しく、また抗菌・防臭という強みも抗菌剤の登場で競争力が下がっていき、経営難に陥りました。

そのころ国内・外資系大手などを経てキャリアを重ねてきた現社長三寺歩が、3代目に就任しました。銀メッキ導電性繊維の販売先の中に高い導電性に着目して、ウェアラブルの研究に利用する大手メーカーの研究所があったことに注目し、銀メッキ導電性繊維を使って自社で最終製品であるウェアラブル製品の生産を目指す方針としました。

その当時ウェアラブル製品は、衣服(ウェア)、データ送信機器であるトランスミッター、クラウド構築と解析のそれぞれを別々の企業が開発するのが一般的でしたが、それゆえサービス提供の柔軟性、企業同士が協力することに伴う金銭的・時間的コストの存在に大きな問題を抱えていました。そこでミツフジはこれを自社で全てを開発し、ワンストップサービスとして提供することでこれを最終製品として販売することを決定しました。こうして2016年の12月に満を持して、銀メッキ導電性繊維AGposs®を使用したシャツ型ウェアを含むミツフジ初のIoT最終製品サービスhamon®※2(ハモン)を発表しました。現在までは生体情報を収集するウェアラブル端末製品の開発、製造、販売をしております。

川俣町は古くから国内有数の絹織物産地として発展し、薄く美しい光沢の「羽二重」で知られてきましたが、現在、川俣シルクの生産量は最盛期の10分の1まで減少していると聞いております。また、川俣町の一部は東日本大震災の避難指示区域にもなっていたことから、西陣織の帯工場として創業したミツフジにとって繊維産業の継続と川俣町の復興に貢献したく、ミツフジ福島工場の設立が決まりました。そして川俣町もミツフジの工場進出を受け入れてくださいました。そうしてウェアラブルIoT製品の生産拠点として工場が完成し、昨年2018年の9月2日に竣工式が行われました。

福島工場では、着用するだけで心電、心拍などの生体情報を計測できるシャツ型ウェアラブルIoT製品の研究開発および製造を行っております。約2.4ヘクタール敷地内には工場棟と研究開発棟も隣接しており、研究から生産への密接な連携を図ることで、既存品の改良や新製品開発のスピード化が可能になります。今後は企業共同開発や産学連携の推進の拠点としても活用していく予定で、縫製だけでなく、ソフトウェア開発の人材を確保し、ウェア、トランスミッター、アプリの開発・製造に注力したいと考えております。

ミツフジは、地域の皆様と連携しながら最新のウェアラブルIoT製品の開発製造体制の強化を行い、福島から世界に向けて新しい可能性を発信すべく、事業を進めてまいります。

(注釈)

※1: AGposs®はナイロンなどの繊維表面に特殊な技術で銀めっきを施しているため高い導電性を持つほか、独自の技術により剥がれにくく、高い洗濯耐性と安全性を有していることが特徴です。この導電性、伸縮性に優れたAGposs®を生体情報が取得できるシャツ型ウェアの電極として編み込んであります。

※2: 着用するだけで心電や心拍などの生体情報を取得することができるシャツ型ウェアから計測できた正確なデータを解析し、体調管理やストレスや疲労度チェック等が可能になるサービスです。現在法人向けエンタープライズとヘルスケア、スポーツの分野にて用途があります。例えば従業員の体調見守り、高齢者介護、スポーツ選手のコンディショニングマネジメントや能力強化等の用途でも活用が期待されており、国内外の多数の企業との提携・共同開発が進行しています。また今後は医療分野において、大学病院などと連携してバイタルデータを管理するなどの展開を検討しております。